

青森の
祭と行事

外崎純一

第一回「曆」

祭や行事を理解するためには、曆の変遷を知らなければ勘違いや誤解を生じることとなるので、最初に大雑把ではあるが曆について述べることにする。

それは、現在行われている祭や行事が現行の新曆と呼ばれている太陽曆、旧曆と呼ばれている太陰曆（正しくは太陰太陽曆）との二つの曆に基づいて行われているからである。新曆は、明治維新により欧米の制度を取り入れようとした明治政府により、旧曆（天保曆）明治五年（一八七二）十二月三日を、明治六年（一八七三）一月一日として改曆されたものである。

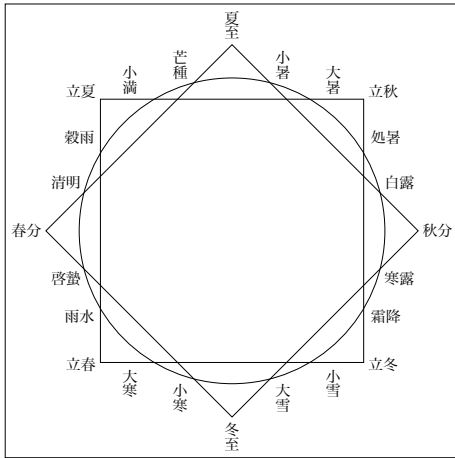
一方、旧曆は飛鳥時代（五九三〜六九四）に中国から伝来し、その後改良が加えられながら、新曆が採用されるまで使用されていた。

また、この旧曆が採用される以前にも日本独自の曆があつたと考えられる。そして、新曆採用後の季節と行事がずれることによる月遅れ（月送り）による行事の実施、一番わかりやすいのが新曆八月に行われる盆行事である。

このように、現在の日本に於ける祭や行事は三種類の暦により行われていることがわかる。月遅れも入れると四種類ということになるが、新暦の月遅れということでは三種類とすることとする。

それでは、どのような行事がこれらの暦によつて行われているかという点、一番わかりやすい例を紹介すると、春分、秋分、夏至、冬至はよく用いられるが、これは旧暦の二十四節気の一つである。旧暦では、一年を立春から始まり大寒までの二十四に分けた。宮中行事は、これによるものが多く、それが民間の行事でも行われるようになった。また、旧暦以前の古代日本人も自然暦のようなものをもっていたと考えられるが、それは月の満ち欠けを見て行われていたと考えられる。旧暦は新月を一日として計算しているが、古代日本人は満月の日を月の最初と考えていたと思われる。それは、小正月や盆、十五夜などの行事を見てみるとよくわかる。たとえば、正月の行事の多くは小正月を中心とした時期に集中している。盆の行事も七日から二十日の間であり、先に述べたように現在では月遅れの新暦八月に行っているが、旧暦では七月であり正月と相対する先祖を招いて祀る行事であったもの

二十四節気



が、曆とともに渡来した仏教の影響により益は先祖供養が中心となり、正月は、新しい年に神を招来する行事が中心となってしまった。十五夜は、その年の豊作を感謝するもので現在でも旧暦で行っている。

以下、季節ごとに祭や行事を述べていくこととしたい。

平成25年11月

二十四節気にはその名のとおり二十四の節気があるのだが、基本になるのは二つの至と分（二至二分）と四つの立（四立）である。二至二分は夏至と冬至、春分と秋分。夏至は昼がいちばん長く、冬至は夜がいちばん長い日である。その中間にある春分と秋分は昼と夜の長さが同じになる。四立とは立春、立夏、立秋、立冬の四つ。これが春夏秋冬の節目になる。二至二分の正方形と四立の正方形を重ねると、八角形の花の形になり、この八つの頂点の間にほかの節気が二つずつ入る。節気の間隔は約十五日である。

図・文 長谷川 權『日本人の曆』
二〇一〇年十二月筑摩書房より引用